

### 私のソビエト・ロシア研究

下斗米, 伸夫 / SHIMOTOMAI, Nobuo

---

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / Review of law and political sciences

(巻 / Volume)

117

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

69

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

2020-03-24

# 私のソビエト・ロシア研究

下斗米 伸 夫

生まれたのは冷戦が始まった一九四八年である。この年、イスラエル国家が五月に創られ、南北朝鮮で別の国家が九月に誕生、一月は蒋介石が中国共産党の権力掌握を見越してトルーマン政権に支援を要請、そして同月にベルリンが東西に分裂した。

その秋札幌に生まれたこともあり、隣国として個人的にソビエト、正式にはソビエト社会主義共和国連邦、通称ソ連、を意識する環境にあったことは事実である。もっともその研究者となるに際しての「私」について語ることはここの主眼ではないし、その時期でもない。いつの日か家族の環境がこの研究にどう関わったかについて触れたいとは思っている。

そういう環境もありソ連・ロシアについて漠たる関心は古くからあった。なかでも、当時中央公論社から『世界の文学』というシリーズが一九六三年の中学二年の時に刊行され、その第一巻がドストエフスキの『罪と罰』という小説であった。ロシア人の名前は一般的に難しいのだが、主人公がラスコリニコフという名前であったことは記憶に残った。しかし二一世紀になって私のソ連・ロシア研究での大きな主題になるとは当時は気づく由もなかった。

高校三年の時に大学進学で第二語学としてロシア語を選んだことはその後の選択に大きな影響をもたらした。その当時中国では文化大革命が吹き荒れ、日本も政治の季節になりはじめた。政治と政治学とは密接な関係があるが、同じではない。大学生二年の一九六八年に学生であったということが政治学者になることを選ぶ契機となった。五月には東大医学部の紛争が全学化、秋には全国化した。五月のバリ、八月チェコスロバキアでのプラハの春という改革運動がソ連軍の介入で潰れたことはこのような学問を選ぶ遠因になった。キャンパスでソ連大使館に抗議にいくとか、それとも「資本主義」に傾くチェコ大使館に抗議にいこうという一部の声もあった。もっともベトナム反戦や学園内の世界的な抗議運動のなかで、市民社会と繋がるという言葉が出たが、大衆運動が行き詰まると党派が表面にで、左翼と新左翼といった勢力争いから徐々に『内ゲバ』といった退行的現象が出てきた。それが中国派とか、ソ連派とか、新左翼の各潮流と別れていたことも比較政治の研究を促す遠因だった。なにしろ東大正門に毛沢東の造反有理が掲げられるような反乱が世界中でもキャンパスでも起きていた。

六九年末、本郷に進学の時に、ふと手にした『マルクス主義』という評論雑誌のなかで、日本のソ連研究を紹介していた。その中で溪内謙という先生が東大法学部でソビエト研究の世界的権威であることに触れていた。

## 「ソビエト・ロシア学」という言葉について

あらゆる歴史は現代史である、といったのは英国の外交官、ジャーナリストでもあった歴史家E・H・カーがイタリア人の哲学者クローチェからとった言葉である。カーは彼をもじって「歴史とは現在と過去の対話である」と語った。ソビエト行政学から出発した溪内謙教授が一九五六年のスターリン批判を受け六〇年前後に米国ボストンに留学、

そこで英国からやってきたカーと同室で、米国の冷戦的知的雰囲気からは異端的であった学風を学んだこともそのころ知った。

それまでの日本のロシア学ではスターリン期のソ連社会主義こそ、いわば戦後日本のモデルであるといった、つまり「ロシア一〇月革命」が「到達点」であるといった解釈があった。

浜内教授（一九二三年生まれ）はこの様な伝統との関係をあえて断ち切った「ソビエト」学を、米国でカーとの交流から学んだ。カーもまたこの「日本人」から学んだことはその一四巻の *A History of Soviet Russia* の翻訳「一国社会主義」（みすず）に語られている。浜内教授はその他ハーバードのロシア研究センターで R. Daniels や R. Tucker との交流から得た学風を日本に持ち込んだソビエト学の泰斗といってもいいだろう。ただしその前提とする「ソビエト」の起源（一九〇五年）については語らなかつた。

その門をくぐって大学院進学を決めた。今から四八年前であった。浜内ゼミでは当時ようやく姿を現し始めたソ連内の異論派ロイ・メドベージェフ、ジョレス・メドベージェフという兄弟の『歴史の審判』（邦訳は石堂清倫訳で『共産主義とは何か』）を修士のゼミで読み、博士一年目には小生が見出し、チューターも務めた『社会主義民主主義』を扱った。その頃は作家アレクサンドル・ソルジェニーツインの異端文学『収容所列島』が一九七三年にパリで出版されたが、その後彼は米国に海外追放にあつたという知的政治的雰囲気であつた。

この間一九七三年初めに提出した修士論文ではソビエト初期政治史上の大論争であつた労働組合論争を取り上げた。ソビエト体制のもとでも労働組合は独立すべきか、それとも国家と関与すべきか、という一九二一年前後の大論争で、トロツキーが組合は不要だという考えで国家と癒着すべきと説く一方、レーニン後の首相（人民委員会議議長）アレクセイ・ルイコフとともに共産党右派のミハイル・トムスキーという組合幹部たちはこれに異議を唱えていた。マル

クス主義の権威であるリャザノフのように組合の国家からの独立派もあった。この問題をめぐって一枚岩ともみられた共産党は三潮流に分裂した。レーニンはこの時共産党内の『分派』を禁じ、以後共産党は政党から国家機関のような上意下達機関になる歴史的契機となった。翌年共産党の書記長に任命されたスターリンは党内異端狩りを始めたが、まだ全権掌握には時間がかかった（一九二九年）。

ちなみにこの執筆時に史料不足を実感した小生はこの仕事を二〇一七年までは公開しなかった。モスクワやボルガに強固な古儀式派（ラスコリニコフ）という宗教的異端派と労働問題の關係に二一世紀になって気付き、ようやくこれを完成させた（『法学志林』掲載、のち『神と革命』二〇一七年所収）。

論文完成後博士論文を考え始めたころ、モスクワで留学生生活を送ったことは幸いであった。田中角栄総理訪ソの置き土産の文化取決の結果であった。ビザ取得に時間がかかり、当初は留学先も決まらず苦労したが、全ソ労働組合の研究所とモスクワ大学寮に落ち着くことができたのは一九七五年半ば。ちょうどデタントの最中、ヘルシンキで全欧安保会議が開かれ、米ソ協調のピークだった。ようやく西側への妨害電波は禁止され、寮内ではビートルズが人気、NHKの紅白歌合戦もソニーの短波ラジオで聴けた。だがモスクワではパンなど基本的消費財が不足していた。

学問上は最大の公共図書館レーニン図書館が利用できたが、そこで一九二五年のイワノボ・ボズネンスクという繊維産業の中心地で、党権力に対するストライキが生じたことを分析した論文を当時の雑誌で見付けた。一九〇五年に日露戦争後世界で最初の「プロレタリアートの権力機関」（スターリン）とされたソビエトという制度の発祥の地であるだけに興奮した。この地の労働者は実際には『アイコン』を所有し、農村と深い関わりを有していた。もっともこの時はこの地名がキリスト教で『ヨハネ昇天』という地名であることの深い意味を考えることは思いもつかなかった。それでも「プロレタリア」権力と大衆の關係を労働組合の政治的役割という観点から一九二〇年末にいたるスタ

ーリン党権力（党と国家の癒着）の成立を考察した論文を執筆し、博士号学位論文として一九七八年に提出した（出版は東大出版会から八二年）。当時はその地に行くことはビザ問題もあって禁じられていたし、モスクワでも文書館史料を見ることまでではできなかった。また宗教という角度からこのような問題を分析できるとはロシア人も含め誰も考えなかった。

それでも当時デテントのおかげで米国に出国した異論派的な知人が、なぜレーニン廟があるモスクワがレングラードと呼ばれるのかと設問していたのは覚えている。七六年夏の帰国に際し、カーの学統を引く英国のバーミンガム大学に立ちよってR・デビス教授やその周辺の友人らに会え、八三年から留学する機会をえた。また帰路に自主管理社会主義と独自の道を歩むユーゴスラビアを訪問、ソ連とも違った社会主義にはじめて触れ、ソ連と東欧との複雑な関係に思いをいたした。

七八年三月に東大大学院法学政治学研究科から博士号を得、成蹊大学に職を得た。その頃から恩師が一九二〇年代末の『スターリン政治体制』の研究を二〇年代末まで完成しつつあったこともあり、一九三〇年代スターリン時代の本格研究に手を染めた。そのころ一九八〇年八月にポーランドで自主管理労組がうまれた。東欧市民社会の復活を象徴した。

朝日新聞の文化部、のちに天声人語の執筆者として机を並べる機会を持つ小池民男氏に請われて、市民社会と党支配との狭間の組合の苦悩といった角度からこの運動を分析した論文を寄稿した。博士論文では、出版助成がでて一九八二年モスクワの短期の史料収集に赴いた。アンドロポフ政権誕生で多少改革的雰囲気が生じ、学術図書館でのコピー制限が緩くなり、スターリン時代の一九三二年、北カフカスで飢饉がおきていたことをしめす地方党内極秘文献を発見、このことを一年後の英国バーミンガムのロシア東欧研究センターにて英文で報告した（『成蹊法学』「クバン事

件（一九三二年）覚書」Acta Slavica Japonica, No.1, 1983）。この英文論文は国際的注目をあび、小生の仕事のなかでは多少知られるようになった。一九三二年の危機はスターリン体制を揺るがせ、数百万単位の餓死者を出していたことを図らずも明るみに出すことになる。それは今日に到るウクライナとロシアとの分裂の歴史的原因でもあり、ソ連崩壊前後の大問題になっていく。こうして英国のデイビス、米国のフィツパトリックといった欧米の研究者にも日本の研究が注目されるようになった。このこともあり一九八三―八五年に新渡戸奨学金を得て英国のバーミンガムとソ連の東洋学研究所に留学でき、その成果を英語でマクミラン社の出版するめぐもついた（Moscow under Stalinist Rule, 一九九一年出版、邦訳は岩波書店から九三年）。

スターリン時代研究をめざしたはずだった政治史研究者としての筆者に、大きな運命の転換となったのが一九八五年三月のゴルバチョフ政権誕生だった。英国からの帰途の一九八五年五月から二ヶ月間、ペレストロイカ初期のモスクワに、科学アカデミー東洋学研究所の招待で滞在した。この時の印象をもとにペレストロイカ研究の必要を説いた論文を論壇誌『世界』で発表した。それから六年後のソ連崩壊まで、嵐のような革命の六年間を経験することになった。

この嵐のような大変動の日々は、それまでの現代史研究者を文字通り同時代の問題の分析者に変えた。それまで日本のソビエト学者は、現実問題にはどちらかといえば禁欲的であった。『プラウダ（真実の意味）』新聞に真実はなく、『イズベスチャ（通知）』といった新聞に情報なしと呼ばれたソ連の情報環境が、ヤコブレフ宣伝部長のもて日々変わり始めた。研究者は毎日変わるマスコミ論調をおいかけるのに忙しかった。「反スターリン」を標榜していたある知人は、自分たちはソ連共産党の批判者だったのが、いつの間にかその丁寧な紹介者になつたと述べた。グラスノスチという表現の自由を求める運動が、ゴルバチョフ書記長から、つまりはスターリンとも似た『上からの革命』

が生じたのである。ただしベクトルは反対であった。スターリンの党Ⅱ国家システムが教会や組合、自由人らすべてを飲み込んだ。筆者が直前に研究したばかりの北カフカスの農民の子（一九三二年生まれ）、そして幼時期は飢餓線上にあった改革派指導者ミハイル・ゴルバチョフは、知識人の解放を皮切りに、組合や市民社会、そして経営の自由化にも手を染めだした。タブーと検閲が消え始めた。

筆者はこの頃から数名の研究仲間とともにペレストロイカ研究会を組織した。中でももっともユニークな研究装置となったのは、当時勤務していた成蹊大図書館が設置したアンテナを使って、ソ連の衛星放送を受像するシステムだった。一九八六年四月にできたシステムで画像をチェックした時、最初に飛び込んできたのはチェルノブイリ核災害（二六日）の悲劇の映像であった。このシステムは急速に小型化し、自宅マンションのベランダに設置した二メートルほどのアンテナで、赤道上空の人工衛星ゴリゾントからソ連極東に送った電波をアナログで受けてテレビ受像が可能となった。これはグラスノスチから東欧革命の雰囲気、知識人が先兵となって伝える旧ソ連の各種の情報を入手するための、絶好のツールとなった。「階級から全地球的価値へ」というグローバル化の先頭を走るゴルバチョフ革命を、こうして理解することができた。空路でも二週ほどかかるソ連の新聞をまっぴいでいとはもどかしいほど早い変化だった。

この間請われて法政大学に一九八八年四月に移った。法政の自由な雰囲気の中、国際会議や何よりも現地に赴く障壁が少なくなった。こうしてペレストロイカについて三冊の本を書いた。一九八八年の『ペレストロイカ』岩波新書、九〇年の『「ペストロイカ」を超えて』朝日新聞社、そして『独立国家共同体への道』だった。一九八九年一月の革命記念日には中華人民共和国の中ソ国境にあったが、直後にベルリンの壁が崩壊、一二月の冬休みには、東欧を視察旅行、ベルリンの壁をはじめ現地でみた。チェコスロバキアの異論派作家だったハベル大統領の就任式演説（二

八日)は、偶然だがプラハ城にいつて直接聞く僥倖に接した。

一九八七年に東大出版会から出した『ソ連現代政治』は学術書としてはベストセラーとなったがすぐに古くなった。ソ連学的に言えば一九九〇年のゴルバチョフソ連共産党書記長から大統領になった時点で体制内改革、共産党書記長が号令する「ペレストロイカ」は終わり、市場改革の進行も相まって社会主義の改革を超えたポスト「ペレストロイカ」が始まったとする新解釈を示した。『ソ連現代政治(新版)』一九九〇年、ではソ連崩壊の可能性には論及していない。

一九九一年八月一九日、ゴルバチョフ大統領に対するクーデターが起きた時、筆者は日本の国会開設一〇〇周年記念で日米議会人会議(竹下元総理・森山官房長官出席)のアドバイザーの資格でハワイにいた。米国からはソ連専門家がだれも来なかったこともあり、筆者の見解は多少注目を浴びた。二一日にクーデターは失敗した。この間東京では有力紙が社説でクーデターやむなしの説を出したが、筆者は勘違いだと断じていた。会議を一日早く出て東京経由で八月末にモスクワに行ったとき、もはやゴルバチョフの時代は終わったと実感せざるを得なかった状況があった。ウクライナ議会は二三日に独立を宣言した。

ゴルバチョフの立場が弱まり、ロシア連邦のエリツィン大統領の立場が強化されたが、二人の関係は複雑だった。第二の共和国ウクライナでは独立派だけでなく保守派をも独立に走らせていた。返す刀でエリツィンがゴルバチョフを切り捨て、『『一國ロシア主義』に転じよう』としてはいたものの、その可能性がどの程度あるかつかみかねていたことだ。

しかしロシアの完全独立のシナリオは強化され、一二月一日のウクライナ独立を問う国民投票後、八日にソ連抜きで、スラブ系三か国首脳がペロベシユの会議でソ連崩壊を進めることを採択した。他方ゴルバチョフ大統領は力を

行使してまでソビエト体制を守る意思はなかった。筆者はその理由をソ連のスターリンによって痛めつけられたコサック農民の息子の歴史観と見た。ゴルバチョフの二人の祖父は、一人が収容所送り、もう一人は死刑となっていた。

## ソビエト学からロシア学へ

こうしてソ連学者としての筆者の使命は研究対象の喪失でその意味を大きく変えていくことになる。旧ソ連学は歴史研究へと純化され、他方一五共和国は、ロシア連邦が旧ソ連邦の後継国家となったものの、のこりの諸国家も完全な主権国家として国際政治システムに新たな位置を得ることになった。この時私は米国行きを決意した。一つは日本の知的政治的状况、変わらない日本にやや愛想をつかしたこともある。それまでは解決のめどがなくなかった北方領土問題などだが、九二年夏には可能性は遠くなったと判断した。冷戦後の顕著な知的学問的現象としては、イデオロギーの終焉とともに、どこでも内部分裂が進行、小生が関与した政治学会や平和学会などどこでも冷戦期は仲間だと思われた内部での分裂が起きていた。

この時筆者は、崩壊後の留学の拠点を一九九二―四年はハーバード大学などアメリカに求めた。米国の研究環境は義務もなく快適だった。モスクワの地域研究という共通の主題で交流のあったハーバード大ロシア研究センター所長となっていたT・コルトン教授をはじめ、ソ連の異端派ネクリッチ教授、バーリナー、ゴールドマン教授など研究者たちはいずれも親切だった。もっとも米国の研究は現金なものでロシア研究センターの関心は、歴史や制度といった伝統的なものから現代ロシアの『移行論』にシフトしていった。ハーバードではJ・サックス教授などIMFブレイン系の中南米の移行期経済をお手本にする議論が盛んだったが、違和感があった。ソ連政治史研究も捨てがたかった。

ワシントンとボストンを行き来しながら、米国に蝟集する世界的学者とともに議論することは楽しかった。なかでもウイルソンセンターで一緒にいた中国の李慎之教授は周恩来の元ブレイン、後の江沢民政権への批判者、民主化派のチャンピオンだった。二〇〇一年法政大学にも招く予定だったが、小泉総理の靖国参拜で不可能となった。間もなく訃報を知った。

米国が主導するグローバル化が始まった。筆者はロシアの民主化・市場経済化の裏側をボストン、そして東京で見ていた。このようなシナリオがうまくいっていないことを理解せざるを得なかった。帰国後「グローバル化の逆説」と題して、グローバル改革の矛盾を見据えたロシア論、旧ソ連の地域論を議論し始めた。この間日本では細川政権の誕生は、野党が選挙過程を通じて勝利、政権を作るというプシエウルスキー教授の民主化の定義からすれば中途半端だった。帰国すると東大系の政治学者（佐々木毅総長、故高橋進氏ら）は改革運動に関与していたが、立教の高島通敏教授などは批判的だった。

小生には国内情勢よりも旧ソ連での改革に関心があった。中でも一九九五年、明石康氏がユーゴスラビアへの国連によるPKOなどの関与を図り、うまれた社会党系村山政権がこれを支援した。そのミッションとして超党派のユーゴスラビア紛争調査団に招かれた。すでに「国際世論」という名目で欧米、特にクリントン政権が、ヨーロッパの混沌をよそに関与し始めたことが気になった。この動きは一九九六年、クリントン大統領の再選戦略からするポーランド系カトリック票取り込みの要請もあって始めたNATO東方拡大につながり、やがてロシアと西側との大きな対立を生み出す遠因となった。

この間、ロシア・旧ソ連改革については一九九二年に『独立国家共同体への道』、一九九八年に東大出版会から『ソ連現代政治』を根本的に書き直した、はじめての『ロシア現代政治』、そして筑摩書店から『ロシア世界』を上梓、

ソ連学とは切れた時点でのロシア学の体系化を目指した。その一端は、法政大の客員教授として招いたロシアの日本学者No.1サルキンフ教授を通じて、ゴルバチョフ・ブレインだったシャフナザロフ教授らとの編著『ロシア変動の構図』法政大学出版社となって結実した。欧米流の「歴史の終焉」でも「共産党の復活」でもないロシア改革論を議論した。

しかしそのころまでにロシア改革ブームは、エリツィン大統領の思い付きもあって迷走していた。また招いたサルキンフ教授の上司で一九九六年のロシア外相から九八年には首相となり、翌年大統領候補にまでなったエフゲニー・プリマコフ教授を名誉教授にするために寺尾学部長などと尽力した。それまで法政には名誉博士号学位がなかった。彼はハーバード大学からも名誉博士号の申し入れがあったようだが、中村哲総長時代からつきあいのあった法政のほうが速く、法政大学の名誉教授一号となった。

またこの時、東西関係にも変化があった。クリントン大統領はNATO東方拡大で対口関係が悪化したが、この分アジアで変えようとした。このこともあって復活した自民党橋本政権とエリツィンとの関係が進展し始めた。この時朝日新聞から日口関係改善のおり、客員論説委員になってほしいという招請を受け、以後三年論説委員としてロシア関連の社説や論評に関与した。このことは、学問の狭い枠に閉じこもりがちの学者には良き経験となったが、新聞記者としての基礎経験のなさを実感した。川奈会談は結局うまくいかなかったし、その後の小淵、森政権の変化が二〇〇二年の鈴木宗男事件という日口関係最悪の醜聞を生み出すとは当時は思わなかった。筑波大の友人、同じ北海道出身の秋野豊氏が国連業務の遂行中にタジキスタンでなくなることを報じざるを得なかった悲しい思い出もあった。

二〇〇〇年に朝鮮戦争の史料を分析したロシアのアジア学者でもあるモスクワ国際関係大学のトルクノフ学長の著作（邦訳『朝鮮戦争の謎と真実』）にたまたま接した。これは一九九四年、つまり朝鮮戦争休戦五〇周年に際してエ

リツイン大統領が公表した関連文書を抄訳した文献であったが、これを紹介・翻訳したことがきっかけとなってアジア冷戦研究を本格的に始めた。この過程で、和田春樹教授をはじめとするそれまでの朝鮮戦争論の欠落に気づいた。他方日本国際政治学会で中国人研究者の朱建栄教授が日本のアジア冷戦研究の遅れを批判したのは心に残った。『アジア冷戦史』、『モスクワと金日成』、そして『日本冷戦史』の三部作は、この論争をきっかけに日本、そして東アジアでの冷戦研究の遅れを取り戻そうと苦闘した軌跡である。同時に二〇〇八年から一年間サバティカルをもらってモスクワとロンドン、ソウルで史料収集をした。

## 古儀式派が繋ぐソビエト学とロシア学

二一世紀になって筆者のソビエト、ロシア研究にもう一つの転機が訪れた。それは二〇〇一年に北海道大学スラブ研究センターに出張してたまたま目にしたロシアの歴史雑誌『歴史の諸問題』誌に載っていた若い研究者オレグ・シヤフナザーロフ（ゲオルギー氏とは無関係）の「ポリシェビズムと古儀式派」という短いが刺激的な文章だった。それはポリシェビズムとソビエトの起源に一六六六年のロシア正教会の分裂が関係し、そのときロシア正教会をおわせた反対派のラスコリニコフ、つまり古い儀式を墨守しようとして追放された古儀式派の流れとナロードニキ、社会民主主義など反体制潮流との関係があるという説であった。一見荒唐無稽に思われたが魅力的な説であって、これまでの自己の研究と通底するものがあった。

一九〇五年にボルガ周辺を中心に生まれ、一九一七年にレーニンなどが権力獲得の根拠となったソビエトとは、マルクス主義やバリ・コミュニオンとは本来無関係であり、ロシア史に密かに根付いた制度が顕在化したものである。

つまり教会も司祭も奪われた当時のモスクワを中心とした正教異端派である古儀式派、特に無司祭派を中心とした密かなネットワーク、歴史的所産なのだという解釈である。

このような議論は聞いたことがなかった。しかしペレストロイカの最中、ウイリアム・スミルノフ教授など数名の政治学者からこの古儀式派の重要性について幾度か聞いていた。一九世紀の専門家メリニコフ・ペチェルスキーの著作を読めとも言われた。そういえば半世紀前、最初に覚えたロシア人の名前もラスコリニコフではなかったか。分裂主義者とは何か。調べてみるとそれほど意外でもない。ちょうどその直前にスターリン時代の共産党のナンバー2、モロトフ首相兼外相の評伝をかいていたこともあり、『党が所有した国家』講談社メチエ、二〇〇二、このモスクワ、ボルガの革命運動と古儀式派との関係の問題は考える必要があるとも次第に考えてもいた。レーニンにつぐ二代目の首相アレクセイ・ルイコフ（一九二四―三〇）も三代目のモロトフ（一九三〇―四一）と同じボルガ河周辺のビヤトカの出身、ほとんど隣人だった。ここには古儀式派はいても工業労働者はそもそも多くはない。

こうして二〇〇八年の留学を利用してモスクワとロンドンで史料を集めだした。なかでもモスクワの下宿はたまたま司祭派のロゴジスコエ墓地という拠点に近かった。彼ら古儀式派はモスクワこそ「第三のローマ」として、ロシア帝国とその首都サンクト・ペテルブルグを宗教敵とみなした。私の下宿も地下鉄「ローマ（リム）駅」近くであった。この地はスターリン時代以降はプロレタリア地区ともよばれたが、なぜそこにローマがあるのか、古儀式派とゆかりの地名にあるのか。彼ら固有の教会は一九〇五年革命で宗教寛容令がでるまで禁止されていたが、教会は禁止しても墓地までは帝国権力といえども撤去はできなかった。こうして墓地管理組合の周辺にヒトと金とがあつまった。その近くに一九世紀、とくに後半から繊維工場がおおく建った。モスクワの民間の商人資本が官僚資本を凌駕し始めた、というのが最近のピジコフらの研究だが、実はスターリン以前の最初のマルクス主義史家ミハイル・ポクロフスキ

「商業資本」といったためにスターリン期批判されていたではないか。

おりしも二〇〇〇年に「ロシアを大事にせよ」というエリツィン大統領の付託を受けてプーチン政権が誕生していた。プーチンもエリツィンも、古儀式派と一定の関係があった。ハーバード大の畏友コルトン氏の名著エリツィン伝では彼の祖父はウラルの古儀式派である。プーチン氏も関係者が古儀式派と関係あると証言していた。実際プーチンがロシア革命一〇〇年の二〇一七年に古儀式派の公認に踏み切ることになった。ちなみにかれは最初の選挙パンフレットとなる『プーチン、自らを語る』の冒頭で、祖父がレーニン家の『別荘』で料理人、しかもその前はアストリア・ホテルで例の怪僧ラスプーチンともあったと語っていた。レーニンの晩年の別荘とは、実は一九〇五年にポリシエビキ党に献金し、その後自殺した古儀式派の大商人サツバ・モロゾフのものであることは知る人ぞ知るである。モロゾフこそロゴジスコエ墓地管理組合の理事長であった。

しかしソ連体制は無神論でなければならないという、左右を問わず日本の「ソ連」学会内外での無理解も大きかった。現代国際政治の前提は一六四八年のウェストファリア体制も含め、宗教と政治の峻別である。筆者の新説には批判があった。二〇一四年のウクライナ紛争までは日本のロシア学会でもカトリックと正教の区別の意識も乏しかった。河出書房新社の担当者が協力してくれ二〇一三年に『ロシアとソ連、歴史に消された者たち―古儀式派が変えた超大国の歴史』を上梓した。出版した時もドストエフスキー関係者は褒めてくれたが、現代政治や歴史関係者からは反応が鈍かった。

それでも二〇一七年の革命一〇〇周年を前にソビエト学を古儀式派論から再解釈する必要があると考えた。そのためには最初のソビエトがなぜ日露戦争末期にイワノボリボズネセンスク、つまり「ヨハネ昇天」市で生じた理由、そこに古儀式派関連のルーツがあることを論証する必要があった。この点はある意味で楽であった。というのもイワノ

ボ・ボズネセンスクの繊維工業の発展を最初に分析した古典的名著、合法マルクス主義者のトゥガン・バラノフスキの『ロシアの工場』（一八九九）、そしてペチェルスキーの古典的名著が、ナポレオン戦争後モスクワ大火のあと無司祭派信徒がこの地に繊維産業を開いた所以を暗示していたからである。

合法マルクス主義とは一九世紀末にロシア資本主義が発達したことを合理化する、むしろ体制寄りの理論であったが、その背景には禁欲主義的な古儀式派資本家がいたことは少し研究すればわかりそうである。ちなみに合法マルクス主義のサークルが最初に立ち上がったのは首都ではなくボルガ沿岸のサマラ、組織したのは後に社会民主労働党メシシェビキ派となる古儀式派でコサック出身の経済学者マスロフである。ちなみに古儀式派にはボルガに消えた都キーテジがあるという伝説がある（リムスキー・コルサコフのオペラ「見えざる町キーテジと聖女フェブロニアの物語」、一九〇七年初演）。ちなみに「大祖国戦争」期にスターリンが形式的な首都としたのもこのサマラ（当時はクイビシエフ）であった。

そういえば修士論文であつた労働組合論争でのトロツキーの軍事的な労働組合揺さぶりに対する組合論争での火付け役は、ボルガの水運組合である。またシリャプニコフなど労働者反対派やイワノボ出のブノフなど民主的中央集権派の活動家もまた古儀式派出身者であることが判明した。

さらに一九二五年の労働組合活発化が深内教授のソビエト活発化の後に続いたという博士論文の蓄積が支えとなった。というのもソビエトも組合（ソユーズ）もいずれも一九〇五年の「革命」で台頭した立憲民主党のミリュコフらリベラル派と、社会民主労働党ら左派との結節点の産物に他ならなかった。一九二五年はNEPの頂点と言われたが、その時一九〇五年のソビエト、そして労働組合（ソユーズ）の活発化が進められた。その背景にあったのは党内のブノフ、カリーニン、ルイコフら古儀式系ボリシェビキであった。一九三七―八年にスターリンは彼らの多くを肅清

した。

ソビエト史における宗教の役割は今ではタブーでなくなつた。しかし研究は多くはない。一九四一年一〇月、モスクワにナチスドイツが迫つたとき、イワノボ労働者は一〇月に決起した。これに驚いたスターリンは宗教和解を進めた。一九四一年一二月、日本軍が真珠灣を攻撃したとき、モスクワでは東京からのゾルゲ情報にもとづいて根こそぎ動員された四〇万のシベリア軍団が反攻に出た。その場こそ、モスクワ郊外のイストラ、つまり教会分裂のきつかけとなつたニーコン総主教が創つた「新エルサレム」であつた。古儀式派の認識からすれば聖都、「第三のローマ」＝モスクワの防衛戦を率いたのはイルクーツクの前儀式派軍人A・ペロポドロフ將軍であつた。「大祖国戦争」での「聖戦」の支柱は正教異端派であつたことを暗示する。戦後抑留者訪問で一九五五年にイワノボを訪れた政治思想研究者、無教会派の南原繁東大総長は、その後ソ連でのドストエフスキー復活の意義を一九六八年にはやくも指摘していた。

こうして二〇一七年『神と革命』を完成、一〇月革命一〇〇周年記念出版として筑摩書房から出版にこぎ着けた。ちなみにロシア革命一〇〇年目にプーチンがやったのはスターリン体制犠牲者への嘆きの壁の建設と、古儀式派教会との国家的和解であつた。

そのことと直接の関係はないが、プーチン・ロシア研究の目的もあり、現代ロシアとの接点では、論説委員にいた経験で各社モスクワ支局長の会であるモスクワ会が、MGI MOとの定期交流をもつことになり、毎年一回モスクワでの研究交流会の議長役を仰せつかった。また小泉政権は森元総理を中心とする日ロ賢人会議を立ち上げ、その一員として領土問題を含む両国政府の民間交流を担うことができた。

なかでも二〇〇六年の日ソ交流国交回復五〇周年に賢人会議では共同宣言五〇周年の会議が提唱された。もっとも

外務省の一部には鈴木宗男事件の余波もあって懐疑論もあったようである。九月に安倍内閣ができたことを理由としてこの会は一〇月一九日の会議直前に解散となった。それでも日ロの民間行事として日ロ協会会長の鳩山由起夫、また河野太郎、朝日新聞主筆の若宮啓文といった一九五六年交渉の関係者とロシアのルシコフ・モスクワ市長の協力でミコヤン氏ら子孫との交流が進んだ。ちなみに松本俊一全権の係累は当時見つけられなかったが、最近関係史料が見付かったと聞く。

こうしたなか、筆者が留学中であった二〇〇八年におきた鳩山民主党への政権交代も対外関係ではむしろ混迷を極めた。とくに二〇一〇年九月、当時のメドベージェフ大統領の国後訪問は、彼の時代には日ロ平和条約締結がないという含意であった。つまりプーチンこそが外交権を持つということにはほかならない。それから一〇年、依然としてプーチン政権との間で平和条約をめぐる模索が続くが、この主題は『日ロ関係史』（二〇一五年、岩波書店、二〇一九年ブリル社）といったロシア側とのパラレルヒストリーの企画同様、それ自身の頁が必要だ。（了）